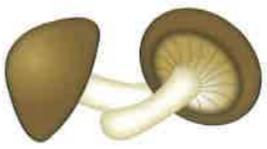




静岡県農林技術研究所  
森林・林業研究センター  
上席研究員  
加藤 徹

## 1 はじめに



### 最新研究紹介

## 原木栽培シイタケの新たな害虫 需要の高まる秋から冬に大きな被害を及ぼす 「フタモントンボキノコバエ」

本県は、シイタケの原木栽培発祥の地であり、現在も、伊豆地域を中心とし、原木栽培が盛んに行われています。原木栽培は、重いほど木を扱うこと及び原木で栽培され、全国の出荷量は、菌床栽培の方が多くなっています。本県は、シイタケの原木栽培発祥の地でもあり、現在も、伊豆地域を中心とし、原木栽培が盛んに行われています。シイタケは、重いほど木を扱うことや、シイタケの発生が気象に左右されやすいことなどにより、栽培は難しいものの、肉厚で風味豊かなシイタケが採れることから、高値で取引が行われています。

鍋物がよく食べられる寒い時期には、シイタケの需要が最も高くなりますが、しかし、近年、その頃にやっかいな害虫被害が発生するようになり、主に原木栽培を行う生産者の悩みの種になっています。

シイタケを観察したところ、まだ小さい幼菌状態のシイタケに、朝と夕方頃を中心に数多く集まることがわかりました（写真2）。このことからも、幼菌の時点で、軸に多数の卵が産みつけられることが推察されました。

やっかみなことに、本書虫により激しい食害を受けても、外（外観）からはほとんどわかりません。このため、食害に気付かないまま出荷し、クレームを受けるケースが最近多く発生しています。



写真2 シイタケ幼菌に集まる害虫



写真1 近年増えているシイタケの害虫被害と害虫（右下）

本害虫による被害は、10月頃から発生し、11、12月頃にピークとなり、春先まで続くことから、ちょうどシイタケの需要が高まる時期と重なります。浜松市浜北区にある森林・林業研究センターのシイタケほど場で調査したところ、激しいときは8割以上のシ

ケの適切な廃棄、更に、廃木の移動及び適切な処分などが考えられます。今後、当研究センターでは、被害が出ない夏期における害虫の生態を探り、その期間における何らかの防除技術や、ほど場の環境改善による被害回避技術などについて研究を行う予定です。

シイタケ栽培には農薬は使えないため防除法が限られます。もちろん、キノコの中にいる幼虫を殺すことはできないため、防除は産卵防止や蛹・成虫駆除、環境改善などとなります。成虫駆除のための粘着シート（写真4）や誘殺灯ではほとんど効果がないことがわかりました。また、シイタケの品種や原木の種類などによる被害の差も確認できませんでした。

このため、現在の対策としては、害虫の発生源となる採り残しをなくすことや、被害シイタケや規格外シイタケの収穫に心がければ、被害を避けられますが、被害シイタケや規格外シイタケの傘の内部を食害する種で、早めの収穫に心がければ、被害を避けられます。

## 6 おわりに

今後とも、シイタケ生産の方々には、情報提供などについて御協力をよろしくお願いいたします。

連絡先 浜松市浜北区根堅2542-8  
静岡県農林技術研究所森林・林業  
研究センター 森林育成科  
FPR@pref.shizuoka.lg.jp



写真3 フタモントンボキノコバエ成虫

イタケに本書虫が侵入していました。基本的には原木栽培のシイタケが被害を受けますが、周囲が開放された施設での菌床栽培シイタケも被害を受けます。このような被害は伊豆地域や県西部で確認していますが、それ以外の場所でも発生している可能性があります。また、伊豆の生産者の方では、被害は10年ほど前から見られるようになりました、ここ数年で特に被害が激しくなってきて、じゅうじゅうのことでした。

## 4 フタモントンボキノコバエ

本書虫を飼育し羽化させたところ、フタモントンボキノコバエであることが判明しました（写真3）。また、写真2の、幼虫に集まる害虫もフタモントンボキノコバエであることがわかりました。加えて、近縁のキノコバエの混在も推察されました。

フタモントンボキノコバエは、ハネ（蚊）に似ています。キノコバエには、菌床栽培の害虫で有名なナガマドギノコバエがありますが、フタモントンボルの小さな害虫で、ハエといつよりも一回り小さくあります。

## 5 被害対策

フタモントンボキノコバエによるシイタケ被害は、千葉県や大分県などで記録がありますが、その防除法を開いたときの幅が約六ミリメートルの小さな害虫で、ハエといつよりも一回り小さくあります。キノコバエには、キノコバエはそれよりも一回り小さくあります。



写真4 粘着シート等による捕獲試験